

編集委員会委員

朝倉康夫

ASAKURA, Yasuo

東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻教授

どの順序で書くべきか難しいけれど、シェアハウス、カーシェアリング、シェアドスペースなど、シェアという言葉が都市や交通にとっての時代のキーワードになりつつあると思う。いずれも生活空間、移動手段、または、道路交通空間を複数の個人がシェアする行為やシステムである点は共通している。これらのシェアに共通して相当する日本語は「共有」であると思うが、「わかちあう」という言葉のほうがしっくりくるように感じる。わかちあうことによって得られる価値の創造が新しいライフスタイルやサービスへの需要の背景となっているのかもしれない。以下では、シェアする時代の交通研究への期待を述べる。

世の中にひとりひとつのモノが満たされていない時代には、日常生活で何かを借りるのは普通のことであった。高度成長期以前のわが国に限らず、数十年前の庶民生活は基本的に少ないモノを分かち合う貧者のシェアの時代であったと言ってよい。20世紀後半の大量生産・大量消費の時代を経て、多くのモノが個人専用化されるようになり、移動手段でさえも地域によっては家族数と同じ数のクルマを所有する世帯も珍しくはなくなった。この時代に運輸・交通の研究を始めた我々にとって、シェアは市場占有率(market share)であり、とりわけ交通市場ではシェア=交通手段分担率(mode share)を指すと言ってもよい。この場合のシェアは市場での奪い合いの結果として得られる競争の分け前に他ならない。パイの拡大やシェアの拡大が時代の要請であったので、運輸・交通の研究テーマも必然的にそのような方向にあったし、それは今でも本流ではある。「奪い合い」としてのシェアの研究は大変に興味深いものの、情緒的に言えば殺伐とした感がぬぐえない。

経済社会が成長を続けて、多様なモノが個人に十二分に行き渡った結果、または、必要に応じていつでも所有することができるようになったがために、最近では、モノを個人で所有することにそれほど執着しない人々が出現するようになったと感じる。そのような人々にとっては、皆で利用できるモノは共有すれば十分で、わざわざ個別に所有する意味がない。たとえば、クルマは世帯で常に保有しておくモノではなく、必要な時に必要な時間だけ借り出せばよい。もちろん、冷静に思考した結果、クルマを所有しないほうが合理的であると判断して共有することを選んだ人々が多いかもしれないが、レンタカーよりもさらに柔軟に利用できるカーシェアリングの人氣が高まっているのは、シェアすることを厭わない時代の価値観を反映していると言える。

もちろん、共有物(クルマ)を使いたい時間帯は特定の時間帯、たとえば週末に集中することもあるので、使用のルールを上手に設

計しなければ、使いたいときに使えないといったサービス水準の低下や、逆に、いつも過剰な在庫を抱えて経済的に見合わないといった事態が発生する。シェアすることは分かち合うことであるにもかかわらず、利用者が使いたい時間を奪い合うような行動に出ればシェアシステムは容易に崩壊する。利用者が互いに少しだけ譲り合うことで、個々の利用者にとってのサービス水準もシェアシステム全体の効率性も向上することがありえるのかどうか、シェアシステムが持続するための条件は何か。いずれも興味深い研究課題である。

シェアする行動の拡大は、生活空間にも見られる。ルームシェアはどちらかといえば節約のため仕方なくという場合のほうが多いかもしれないが、個人のプライバシーを多少犠牲にしても、空間を共有することによって得られる連帯感や信頼感の醸成に魅力を感じてシェアハウスを選択する若者が少なくないと聞く。異なった価値観を持つ者が同じ空間を共有することで新しいアイデアが創造されるということもあろう。空間を分かち合うことで生み出される新しい価値があり、またそこから新たな行動様式が出現するというところもある。新たな行動様式は新たな交通パターンを生む。定量的な分析には見合わないかもしれないが、生活空間の共有化が生み出す新しい交通について定性的または質的な検討を行うことは興味深い。

シェアドスペースはオランダの交通エンジニアである Hans Monderman氏が提唱した歩車共存道路の概念である。従来から、歩行者とクルマの動線を分離することが容易でないような生活道路では、歩行者に優先権を与えると同時に、歩行者とクルマを分離しないで共存させる工夫が講じられてきた。具体的には、一方通行、行き止まり、交差点の斜め遮断、車止め等によって通過交通を入れないこと、蛇行、盛り上げ舗装、狭窄等によって車の速度を引き下げることなどである。これに対しシェアドスペースは、歩車道境界の縁石、道路上の区画線、信号や標識類を撤去した上で、空間デザインに配慮し、最低限の交通ルールと人々のコミュニケーションによって歩車共存の空間に再構築するという空間概念である。安全のための施設を空間から間引くことで、逆に安全に対するドライバーの注意力を喚起し自律的に安全な道路交通空間を創造しようとする試みである。歩行者・自転車とクルマが共有する移動空間を分かち合い、折り合いをつけるために空間の設えを敢えて退化させる方法であるともいえる。シェアドスペースでのヒトやクルマの挙動については、奪い合いの視点からの解析も、ゆずりあいの視点からの解析も可能であろう。移動主体の態度の違いがどのような状況の差異を生じさせるか。極めて興味深い課題である。